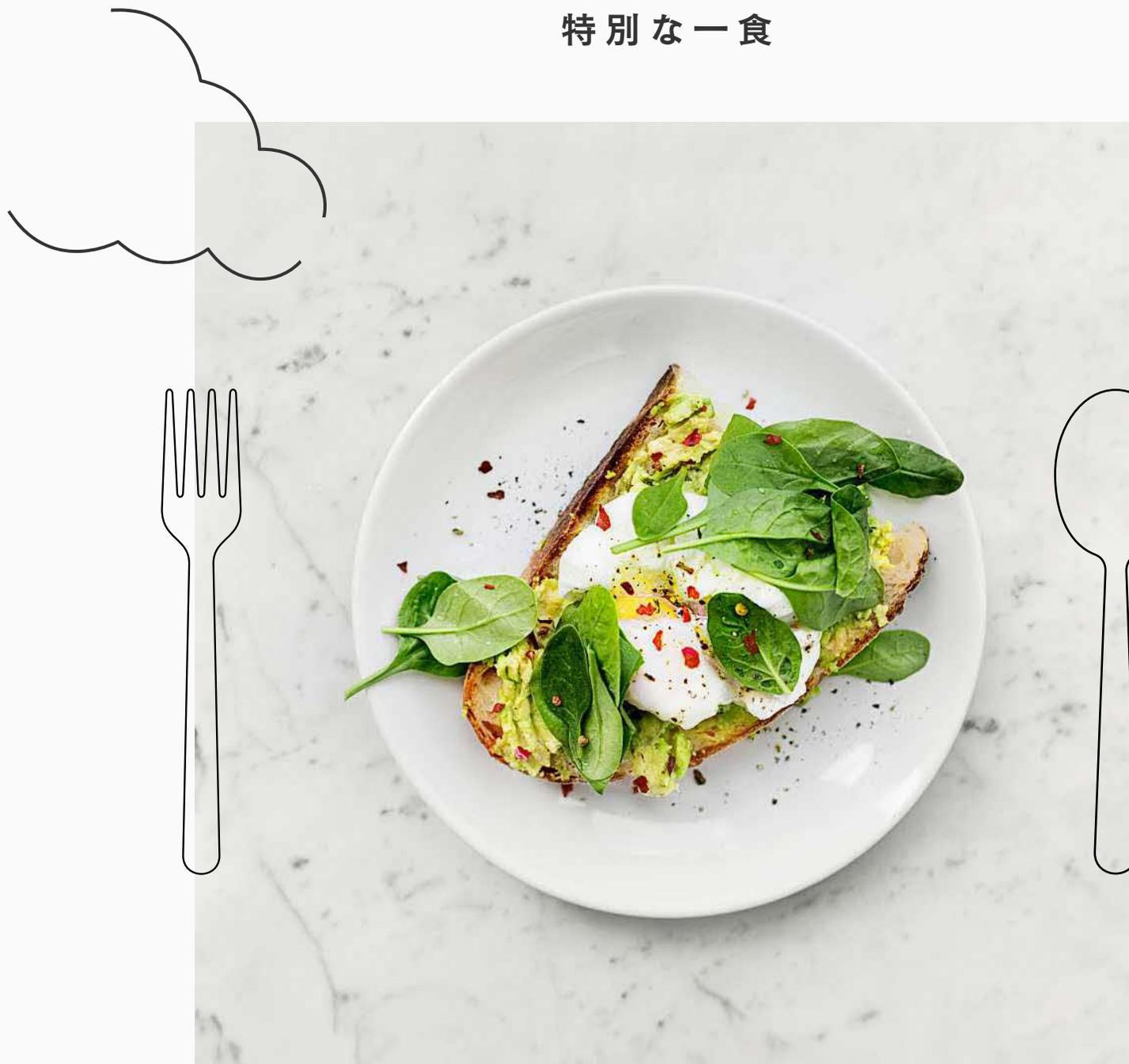


# TODAY'S SPECIAL

特別な一食



この夏を振り返って、3年生が「特別な一食」  
というタイトルでエッセイを書きました。  
一部をご紹介します。

## 特別な一食

---

私はあまり会うことのできないおじいちゃんとおばあちゃんと盆休みに食事をしました。ここ数年会うことができていなかったのですが、盆休みに家に行くことになり、今までであった出来事や日常を話し、いつもとはまた違う特別な一食でした。

ある日、父が夜ゴハンにナポリタンを作ってくれた。たまにしか食べれない父の手料理は、野菜の大きさがばらばらで、ものすごく大きかったりものすごく小さかったりする。久しぶりに食べた父の手料理は、とてもおいしくてすぐ食べきってしまった。作ってくれてありがとう。今度は僕が作るよ。

夏休み中、弓道部でインターハイに行った。北海道の札幌で、みんなで目標にしていた札幌ラーメンを食べた。ラーメンを食べていく中で、本当に皆でここまで来ることができたのだと実感した。

初めて食べた味噌ラーメンは、とても特別な味がした。

始めてホットサンドメーカーで料理をした。始めは表面を焦がしたり挟むとき具がこぼれたりした。それでも何度か使用するにつれ火加減や具の量や並べ方がわかっていった。

最後には外はサクサク中はチーズによってトロっとしてとてもおいしいホットサンドを作ることができた。

---

ESSAY

## 特別な一食

---

焼き肉をした。

自分が3年間続けてきた野球の、最後の大会が終わってから「よく頑張った」と家族で焼き肉をした。おいしいお肉をたくさん食べて幸せだった。

私は夏休みを振り返って「特別な一食」と聞かれたら、北海道での食事を思い出した。どれも見た目から美味しそうで毎日満足していた。9泊10日という長い旅行も終わり、久しぶりに親の作った料理を食べた。高級な食事を食べたわけではないが、とてもホッとした。北海道ではいつも気を張り詰めた状態で食事をしてきたが、家の料理を食べた瞬間にようやく落ち着くことができた。だから私にとっての「特別な一食」は親の作った料理だと気が付くことができた。

履歴書書き終わりに食べる、コンビニのカップラーメン。

コンビニ前で友達と語った夢や将来。食べ物はカップラーメンで素朴だが、夢はでかく思い出は深く残っている。ありきたりで何気ないようだが、自分にとっては特別な一食だった。やるせないしあくせくする毎日だったが、この一時のために頑張れた。色褪せない思ひ出。

私のこの夏休みの「特別な一食」は、学校終わりに友達と自転車で食べに行ったすき家の牛丼です。なぜかという学校終わりに友達と軽いノリで浜田のすき家に行くことになって片道約2時間かけて自転車で食べに行った牛丼は疲れが吹っ飛ばすくらいおいしかったからです。

---

ESSAY